

の暮らしです。

(北海道

五十嵐 甚吉)

青春無残の追憶

岩手県 千葉 義一

弘前から満州へ

昭和十九(一九四四)年六月に十九歳で繰上げ徴兵検査を受けた後、秋頃から入隊通知が村内あちこちに届くようになった。十二月中旬、遂に役場を通し盛岡連隊区司令部から、二十年二月十日、弘前騎兵連隊に入営せよ。八日、一ノ関駅より軍用列車に乗車のことであった。

何となく慌ただしく感じられ、身の整理、学校時代の教科書、ノート類、大事な物をリングの木箱に詰め、「除隊まで保存のこと」と墨で書いて座敷の押入れの奥に押し込んだ。親類縁者の挨拶廻り、近隣神社の武運長久祈願などに忙しかったが、当時若者は皆兵隊に行く時代なので今後の運命、不安、悲愴感はなかった。

出発三日前の縁者、知人を呼んでの「立ち振舞」

も無事済んで、二月七日出発日は庭いっぱい警防団員、愛国婦人会、部落民を前に国民服にたすき姿、日の丸を持ち、軍歌や万歳に送られ、更に徒歩の行列に見守られ、村社熊野神社で祈願祭と型通りの送別風景でもあった。村内の入営者は私のほか岩渕鬼子男、鈴木勇助、菅原昌人、鈴木軍一の五人であったが、戦後生還したのは二人で、三人は傷ましくも満州、シベリアで戦死している。

この日は一関の旅館で最後の宿なので父、叔父、父の同級生の那須新四郎村長も一緒に泊って、翌日は雪の多いなか、駅前六時集合、部隊から出迎えるの下士官から厳しい点呼があつて軍専用列車に乗り込み、粛々と出発するが、これが今生の家族との見納めかと思えば一抹の緊張があつた。

一ノ関発の軍用列車は途中各駅から仲間が乗車し、約五百人ぐらいの県人が乗り込み、途中奥中山あたりで豪雪によって列車は立往生となり、一日遅れの二月十一日朝、弘前に到着した。

我が隊員は搜索第五十七連隊補充隊と呼ばれて

いた騎兵隊に入隊したが、馬に乗れない不安もあったが、幸い乗車中隊であつたので安心した。

二日ぐらいいお客様待遇で古兵も優しいと思つたが、三日目頃から気合いがかかり、罵声やビンタが飛ぶ内務班(軍隊の起居室)の日課となつた。

まもなく、今後の行き先は満州ハルピンであると告げられ、冬軍服の支給があつたが小銃は持たない。帯剣は五人ごとに一人分だけ、飯ごうは板で作った弁当箱、水筒は竹筒に栓と紐をつけたものの、外套着流しの何ともしまらない姿で渡満することになつたが、行く先は防諜上、家族に連絡や他言は絶対慎み、憲兵の厄介にならないよう注意せよとのことがあつたし、「貴様達は運がよいぞ、南方方面では大分苦労しているが、ハルピンはロシア町で平和で住みよい所だ、白系美人が待つているぞ」などと冷やかされもした。

二月十八日はいよいよ満州に向かう日となり、再び同じ師団の初年兵が集合。列車に各連隊ごと

に順序よく収められ、防諜上か鎧戸よろいどを下ろし、静肅にしみだりに車内を歩かないことを指示された。

引率者はハルピン捜索一七四連隊から初年兵受領に出張した輸送指揮官西宮直吉大尉。その下に笹本正三郎准尉、長谷川金之助曹長、種田軍曹、千葉伍長等々の顔ぶれであった。

列車は夜になり、岩手県下に入り時々停車した。いつの間に密かに連絡したのか、乗車兵の肉親が息子の名を呼び右往左往して差し入れする風景が見られた。一ノ関駅停車は真夜中であった。外から窓を叩く音がして鎧戸をそつと少し開けたところ「息子の〇〇を知りませんか」と聞くが判らなかつた。「息子に会いかねたので食べて下さい」どつしりと重く温かい餅を差し入れられ、分け合つて古里の味を楽しんだのであった。

岩手を過ぎると、列車は弁当の差し入れと給水駅のほか殆どノンストップで一路九州に向かつた。東京近辺では空襲の焼跡を覗き内地の今後を思いやりながら、珍しく空襲にも遭わず二月二十一日、

九州博多港到着。旅館に入り、銭湯でさっぱりしたのであった。

その晩、意外な事件が発覚した。携行糧秣かんめんぼうといつて乾麵包かんめんぼう（軍隊用ビスケット）三袋ずつを配られ、軍の許可なしに絶対食べてはいかんと厳命されていた。たまたま食べる姿を上官に見られたのであろう。麵包を持つて集合せよとのことで検査を受けたら全く食わない者は少なく、多少なりと手が付けられ、三袋全部食べた者も多かつた。種田軍曹から「軍命令のない携行糧秣に手をつけるとは何事か。大変なことをしてくれた。部隊にいたら軍法会議だぞ」と脅かされた上、食べた者に初めて顔に拳骨一発ずつくらつたのであった（後で結局手続きをして不問に）。

翌朝、博多港から出発の連絡船では敵潜水艦にいつ襲われるか判らないということで、横になつたり眠つたりは駄目、正しい姿勢で座した。夕刻、無事朝鮮釜山に上陸したが、物珍しがつての外出は禁止され夜中に出発。翌朝、朝鮮の都京城（現

ソウル)で停車中、駅前和市街地を一目見ることができた。

列車は一路朝鮮を北上し、日本に併合されても貧しい生活を想像しながら満州国境を越え、二月二十五日早朝、目的地哈爾濱ハルビン駅に無事到着した。駅のプラットホームの一隅に「伊藤博文公殉難の地」の標識が目についた。明治四十二(一九〇九年)年日韓併合の立役者とみられた元総理伊藤博文が朝鮮の安重根あんじゆうこんによって狙撃された場所であるという。

初めて見る異国はロシア風の建物が並び、駅前広場には貨物を運ぶ何十頭もの馬車がまぐさを食みながら荷待ちする姿があつて、馬のにおい、馬糞のにおいが立ち込め、垢に滲んだ綿入れ刺子の満服姿の馬丁が、零下三〇度の寒さに耐えて右往左往し、活気に溢れていた。

異国情緒のハルピン事情

ロシア革命の前、ツアーロシアが一八九八年に

不凍港大連をめざす南進の野望のうちに東支鉄道敷設隊が松花江岸のこの地に根を下ろし、ハルピンと名付けて拓かれた街であつた。やがて北満の中心地であるこの地を政治経済外交の根拠地として、放射状の街並み、ロシア正教の寺院は中心部の中央寺院をはじめ、数々のミナレット(尖塔)やルリ色葱坊主の教会を設け、革命後は新体制のソビエトと決別して永住を決め白系ロシア人と呼ばれ、自由な歓楽郷として繁栄していた。

日本軍が昭和七年占領後もロシア人と自由に共存していたが、キタイスカヤや松花江岸の太陽島はじめ遊び事欠かない歓楽街も多く、一方下町フウジヤウ傳家甸はアヘン臭ただよう不気味な町で、私服憲兵や警察官が忍び込むと帰ってこない恐ろしい場所もあつたという。

ハルピンは北満経済を動かす大動脈のかなめであるだけに、日ソ相互の諜報活動も盛んで、中心高台に建つソビエト領事館に掲げている赤旗の頭の大きい球には廻る窓があつて、四六時中日本軍

兵舎や演習をキヤッチしていると言われていた。

我が搜索連隊は中央寺院より東へ約二キロメートル、煉瓦塙が巡らされた重厚な煉瓦建で、日露戦争当時のロシア軍の將軍の住んだ兵舎で、將軍の名をとりミルレル兵舎と呼ばれていた。

兵舎から北東約四キロメートルの高原に北満一を誇る高さと重厚さを持つ忠霊塔があった。この付近は昔はロシア軍の射撃場であったという。

ここで明治三十七年四月二十一日夕刻、横川省三、沖禎介がロシア軍に銃殺され、後に二氏の殉難の碑が建てられた。一回駆け足で参拝した記憶がある。横川、沖は銃殺までの間ミルレル兵舎の弾薬収蔵庫に監禁されていたと言われ、窓の鉄格子は頑丈なつくりとなっていた。横川省三は岩手県人で私なりに深い関心を寄せていたので、その人物を紹介したい。

日露戦争が始まって間もない明治三十七年四月、北満チルルケー駅前付近で満州、蒙古の地図や爆雷を持った二人の日本人がロシア軍に捕まった。

二人はチチハルに近いノン江にかかる鉄道橋爆破が目的だといわれ、蒙古人のラマ僧に扮してテントを張り計画を練っているとき、ロシア軍の巡察にあい、一旦立ち去った一隊が思い直して引き返し捕まったという。二人の洗面のしぐさをみて日本人と見破られたとか、湯飲みを見て見抜かれたとかの言い伝えが残されている。

横川省三は南部藩士田村勝衛の子に生まれ、横川家の養子となる。「求我社」に参加して自由民権思想の洗礼を受けて上京。明治十年政府要人襲撃を企てたとされる「加波山事件」に連座して六カ月の禁固刑。後に朝日新聞記者となって二十六年郡司大尉の千島探検に同行取材する。また、黄海の海戦、台湾の役にも従軍取材し、血湧き肉踊る記事を新聞に送った。のちアメリカに渡り移民の援護活動の後、日露の風雲急を告げるとき、軍の密命を帯びて清国に入り、日露開戦とともに軍事探偵として沖禎介ら六人と決死隊を組み、ロシア軍後方補給路を断つ行動に出たものであった。

二人の最期は、悪びれずに日本軍人と称し、名誉とする銃殺を希望することを述べ、残りの所持金をロシア赤十字社への寄附を申し出て、横川は二人の娘に宛てた遺書を敵の將校に託ししょうよう従容として数奇な運命を閉じたという。

ハルピンでの新兵教育も僅か二カ月で、四月中旬更に西の奥地齊々哈爾(チチハル)に移動となった。

ハルピンからみると街は小さく、チチハル駅舎はホテルを兼ねる大きい建物だが、周囲には家もない田舎の町で、満人民家も土壁の汚い家が多く、周りの沼には牛、豚、子供達と一緒に泥沼で遊ぶ風景もみられた。

兵舎は駅の裏約二キロメートル原野の中にポツンと建つ木造二階建てで、隣に高いコンクリート塀の中に人影も見えない諜報部隊があつたようだ。

兵舎裏は広い原野で演習場でもあり、すぐ裏には自活用の畑があり、野菜づくりができた。

ハルピンから移動の貨車の中で、初年兵の〇君が法定伝染病である流行性脳膜炎にかかったので、初年兵をはじめ相当の兵隊が毎日チチハル陸軍病院に通い、喉にリゴール塗布の治療の思い出がある。

日曜日には外出で古兵達が街にいそいそ出かけるのに、我が初年兵は外出禁止、二回ぐらい古兵引率で市内見学といって五人一組で出たことがあつたが、市街中心部の軍人会館で僅かのケーキを買つてお茶のサービスで時間を過ごし流沙公園で一休みし、最後は映画館で珍しい当時の同盟国であつたドイツ映画が見られ、スクリーンの上下横には日本語、中国語、韓国語の訳文がついていた。

搜索連隊は約三百人で、自動車歩兵二個中隊、戦車一個中隊の小ぢんまりの連隊ではあつたが、兵器修理班、通信班、輜重などを持っており、戦闘時には師団先頭に位置し、索敵、敵情調査、師団司令部への通信連絡等の任務につく。主な装備として車載の無線機四基、携帯無線機五基、有線

通信一式、爆破器材のほか戦車大型二両、中型(三人乗)十二両、輜重車(トラック十両)、馬約三十頭を持つ俊足即応を誇る連隊とされていた。

我が第二中隊は乗車中隊で、山形県上山市出身の島津精一中尉(召集将校)を中隊長とする山形県出身の召集兵に、我ら岩手出身の六十四人の初年兵で構成、東北弁が通用するものの中中の兵隊もおつて内務班(兵隊の日常生活する部屋)は気合いがかり、「馬鹿野郎」とビンタの音は絶えなかったと思う。

初年兵教育は今までの基本から一歩進んだ実戦演習に入り、裏の演習場で特攻訓練として、敵戦車を迎え、銃と爆薬を持って匍匐前進し前方に迫る戦車を迎えタコ壺を掘って待ち、目前に来る戦車の腹部に飛び込む訓練を毎日やらされた。

この訓練は、世界一の陸戦国を誇るソ連の戦車は鋼板が厚くて、日本の火砲で撃ち抜き^{かくざ}擱座させることはできなかった。そこで鋼板の薄い敵戦車の腹部に爆薬を抱えて飛び込み爆破させる苦肉の

戦法をとったが、それには成功の有無に拘らず、飛び込む兵士の確実な死があるのだ。

訓練は、疲労のほか、軽機を横にして地面から上げて匍匐前進するので両肘に擦り傷ができて血膿が染み出る毎日で、上衣の両肘は穴があくほどで、また三中隊の戦車の脇にとりつけた赤旗に飛び込む訓練中、薄衣一等兵がキヤタピラに足をかまれ怪我をしたのであった。

チチハルでの楽しい思い出は指折り数えて待った六月六日の部隊創立記念祭であった。演習、勤務は一切休み、初年兵も無礼講。中隊対抗の相撲大会、銃剣術試合も午前中で、午後から演芸会が開かれた。

市内の三業組合(料理屋、旅館、飲食店)から芸妓や女給さんを集め、あでやかな唄や踊りの慰安芸能大会。それに続いて各中隊から兵隊の歌、劇、浪曲、漫才などが披露され、夕方からは酒、酒保品で中隊ごとの祝宴となり、連隊としては最初に最後となる饗宴を楽しむのであった。

ウサコウでの陣地構築

六月中旬に連隊は再度移駐することとなる。行き先は師団の各連隊が既に移動済みである満州と内、外蒙古の国境に近い興安北省五又溝^{ウサコウ}での陣地構築につくことになった。

連隊内の兵器、一切の物資を梱包して隣の香坊駅に運び、六月二十六日、鉄道貨車に積んで、夜を待って密かに出発する。白阿線（白城子くアルシヤン間）を西に入る列車は、翌朝に日本人により拓かれた街、興安の駅に着き、しばらく停車した。駅頭に「中村井杉両烈士殉難の聖地」の標柱が目についた。

昭和六年六月、現役の中村震太郎大尉と井杉延太郎退役曹長と現地案内人二人が、この奥地察爾藩^{チャルシン}において、蒙古方面視察で中国側の許可による護照（パスポート）を所持していたにもかかわらず、中国屯墾軍により虐殺される事件があった。これがやがて満州事変の引き金になったといわれている。

ここから名に負う山脈「大興安嶺」越えとなり、山峽を縫って列車は喘ぎあえぎ進む。湿地帯には色とりどりの野の花が咲き乱れているものの、疲れた兵隊達にはお花畑を觀賞する余裕もなく眠りこけている。

目的地ウサコウは累々たる山岳の谷間の駅で、周囲に淋しい満人部落があるだけ。そこから先、約八キロメートルの山岳の陣地に入るが、麓の狭い場所に粗末な木造兵舎や物置き、炊事場、掘っ立ての馬小屋があった。兵隊達はただ啞然とするばかりであった。

しかし、我々初年兵にとり一期検閲（三カ月の初年兵の基本訓練）が終わり、古兵の気合いも薄らぎ肩の荷がおりた。続いて七月十日には初年兵が陸軍一等兵に進級し二つ星となり、我ら幹部候補生は二階級進み、幹候上等兵となった。

ウサコウでは七月中旬、本部要員と炊事班を残し大方四キロメートル程奥の「日の出山」に移る。ここには重畳と続く山脈に、既に他部隊により構

築された地下陣地があつて、ソ連、外蒙古に向かつて対戦車攻撃用の地下砲座、これらを結ぶ半地下通路が秘密のうちに作られており、ソビエト軍の進路に待ち、敵の侵入を防御する作戦であつて、我が任務は完成後の陣地が上空から丸見えなので、露出部分に芝生を運んで張りつける仕事である。

最早、軍人たる訓練演習は止めて、毎日がモッコで芝生運びの土方稼業、各班ごとに駆け足で山盛りモッコの競争で、今日は何小隊でモッコ棒何本折ったとかの自慢話に花が咲いた。

三食の食事は、山の下の本部炊事場で炊いて樽に入れ馬車に積んで、ころころと一時間もかけ運ぶ始末。陣地のかげにトンネル状の洞窟が作られており、中に床板を張って眠る。夜山頂のドラム缶風呂に入浴しながら興安嶺の山並みを見渡すと、望郷の念にかられ、家族のことが案じられる。

夜中の不寝番で洞窟周囲を巡察中に狼の群れの咆哮ほうこうを聞くことがあり、遙か国境側からサーチラ

イトの点滅や、淡いノロシが上ることもあり、近辺に侵入しているソ連の武装諜者（スパイ）との交信らしく、極度の緊張を覚えることがある。

兵隊達にとつて何カ月前まではハルピン、チチハルの都市にあつて、古兵達は日曜ごとに外出が許され、こざっぱりした軍服に着替え、鏡を取り出しひげをそり、いそいそ街に繰り出した雰囲気にくらべると、山を相手の国境警備の何と味気ないことよ。古参の兵隊達にとり、本当は今頃は満期除隊になり家庭で妻子と平和な生活に戻るはずであつたのが……一様に感傷的になるのであつた。

さらばハルピンよ またくるまでは

しばし別れの涙がにじむ

恋しハルピンの街の灯みれば

……………

彼らは過去をしのび淋しそうに歌うのであつた。いつの間にか鼻ひげをたくわえ、不精がめだつ

ようになった。おかげで初年兵いじめが減って連帯感が湧いてきたようだ。要領のよい歴戦経験者は車輛班からメチルアルコールを貰ってきて火をつけ、臭いを消して飲む姿もあった。

あとの話になるが、これほどの莫大な経費をかけ、兵隊を酷使して作った築城も、完成後に据えつける砲や兵器、装備も皆無。また情報もソ連側に筒抜けで、開戦後にも侵入敵軍はこの山上陣地を避けて通り、効果を挙げることなく無駄な施設となったが、敗け戦とはこんなものであろうか。

ソ連軍侵入を迎え撃つ

その日は忘れることのできない昭和二十年八月九日であった。当時私は体調を崩し、山から下りて本部勤務していた。夜明けと共に国境方面からキーンという金属音に起こされ、営庭に出て空を仰いだ。相当の高度で十数機の戦爆連合編隊が、南満方面に飛んでいく。連隊本部では師団司令部から何の連絡もない。

日ソ不可侵条約があと一年の効力を持っているので、ソ連機は考えられない。結局、空を仰ぐ兵士達は「日本にもあのような優秀な飛行機があるんだな、一体どこから来てどこへ行くんだろう」と、呑気なものであった。しばらくして再度二十機ほどの編隊が南東に飛び去った。

狭い営庭で朝の点呼をとり、のんびりと体操などしていた。その時、東の方から一機の戦闘機が山峡に沿った超低空で現れ、点呼中の兵隊に襲いかかり、バリバリと機銃掃射を浴びせる。近距離で、口径が大きいのか、真つ赤な火の弾が斜めに雨のように見えるほどであった。過ぎ去った敵機は方向を換えて再度攻撃してくる。近くのトラツクの下に素早く潜り込んだ。幸い人に怪我はなかったが、炊事場の粗末な屋根を通して炊事中の釜が射抜かれ朝飯は抜きとなった。

いよいよ、ソビエトと戦闘態勢に入ることになったのに実感が湧かなかった。第一西部最果ての国境で、戦闘に必要な武器弾薬も不十分な師団一

万三千人の兵力で、この陣地を護り切れるのか一抹の不安があるものの、切実感はなく意気軒昂である。

この兵舎は再度敵機が来襲するに違いないことだが、応戦し得る対空砲火は何もない。「千葉よ、兵隊一人連れて前の山の上から軽機関銃で敵機を撃て」との命令で、二人で軽機を担いで兵舎前の崖を登り待機していた。

やがて一機が来襲して兵舎に機銃掃射を始めた。高度はこちらとやや同じで機中の射手が近くに見える、一瞬笑みを含み楽しんで引き金を引いている顔に見えた。チャンスとばかり軽機を発射したが当たる気配はなく、敵機は急上昇して山頂の作業隊を襲撃している模様であった。この日は一日中数回にわたり、戦闘機、爆撃機連合の大編隊が東南方面に飛んでいた。

西口（シーコウ）の激闘

八月十四日、西口の見通しのよい平坦地を挟み

両軍が対峙した。稜線の向こうから時折砲声が聞こえたが、時間と共に迫撃砲、重機関銃のダダダ、軽機関銃のタタタンの音が烈しくなり、バラバラと弾の落下する音、敵の姿は見え遠くからのめくら射らしい。

兵力の大きい歩兵二〇一、二〇九連隊の主力が第一線に展開し、車両を持つ搜索連隊は後方に位置した。砲声はやがて近くにとどろき、弾の落下も烈しくなってきた。友軍の兵器としては数少ない迫撃砲、重機、軽機、擲弾筒などで弾丸不足、あとは各自の小銃だけ、弾も一人五発ずつが配布され、加えて接近戦になるまで無駄に撃たないよう指示されるという厳しいもの。

やがて稜線の向こうに戦車が待機しているらしく、ちらちら姿が見えるが、爆薬をかかえて飛び込む斬込隊の襲撃を恐れて近づかない。代わりに日本軍に大きい火砲がないとみてか、敵山砲が堂々と姿を現し、地面に伏せている友軍めがけてドロンドロンと撃ち込み、他の火砲と併せ耳をつ

んざく攻撃に、火力のない友軍は右往左往の混乱に陥り、戦死戦傷者続出の激戦となった。

昼過ぎ頃、後方にいる我が方のそばに迫撃砲弾二発が落下炸裂した。二〇一部隊の輜重車両四台が敵に発見され、馬車と馭者四人が即死となった。その一人が一緒に入隊した隣部落の菅原一等兵であった。合掌して別れた。

午後に至り、膠着状態（ごうちやく）で死を待つより積極的に稜線を越えて戦線を広げることになり、我が連隊も峯を越え、視界のきく場所へ伏せて撃ち合う態勢をとった。胸を敵弾に射抜かれぬよう鉄帽を敵前に向け、流れ弾を避ける姿勢となり、軽機関銃の引き金をかけて待った。

前方百メートルぐらい前から、このここらに向かってくる人影が見えた。敵か味方かと目を凝らしていたら、後ろから「おい、千葉、敵が来るのになぜ撃たんか。どれ、軽機を寄せせ」田口准尉、長谷川曹長の二人は膝射ちの姿勢で五、六発点射したが、自動小銃をかかえた敵兵はあわて

て崖から向こうに飛び降りたようだ。あとで進藤連隊長の述懐によると、敵兵が知らずに近づいてくるので、捕まえて敵状をさぐるつもりで静かに待っていたところ、横の方から狙撃されて惜しくも逃がしてしまったと書いてあった。

敵は接近する気配はなく、遠方から惜しみなく乱射してくる。榴弾砲であろうか、シュルシュルと音がして頭の上で爆発し、破片がバラバラと降ってくる。後ろでは「〇〇上等兵負傷」の声しきり。「澁谷軍医負傷。衛生兵集合」との声がする。

夜になると敵方から照明弾や曳光弾（えいこうだん）が頭上を飛び交い、真昼のような明るさにさらされ、当方の動きが丸見えで、砲をどんどん撃ち込んでくる。ソ連軍には熟練の狙撃兵というのがおり、砲とか将校を狙うと確実に当てるので油断できない。

左右先頭の歩兵部隊は、下がる敵を追って前に出たようで、「〇〇部隊、××山占領」や「一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。一つ軍人は礼儀を正しくすべし。……」以下軍人五ヶ条を高唱

する元気な声に励まされた。搜索連隊では夜陰に紛れ、夜襲を決行すべく銃剣を黒い布で覆い、地下足袋に履き替えた二個小隊ほどが音を立てぬよう敵陣に向かった。翌日、夜明けに帰隊したが、敵は白兵戦を恐れ後退したらしく、もぬけの殻で全員無事であった。

八月十五日朝、敵は引き上げたのか静かで平常な山岳に戻り、友軍は林の陰に集合し一刻の休憩をとった。この緒戦で優勢な敵に包囲され、戦うに對抗できる武器もなく撃たれればなしで反撃できない情勢に、兵士達は今後の戦闘が思いやられるのであった。

僅か六年前、すぐ近くのノモンハンでの国境紛争事件で、関東軍が事実敗北の苦汁をなめた教訓を、なぜ今日まで生かされなかったのであろうか。

対独戦争で辛くも勝利を得たソ連。戦車、火炮、弾薬は豊富であったが、粗末な服装、所持品は何もない汚い兵隊達ではあったが、我々がマンドリ

ンと呼んだ軽くて短い自動小銃と水筒だけ、背囊はいのうもない兵隊が多く、銃は逆さに背中に背負い、自由なスタイルで鼻うたで行軍している。

食事はトラックに積んだ携行糧秣の粉ミルク、缶詰（大方アメリカの援助品、牽引車に引かせたパン焼窯が後尾について、これらを配分して昼食をとる軽快さ。また、小銃弾は三十数発と七十数発の弾が軽機のように連発式。従って立ったままの腰だめで体を左右に振って乱射、数打れば当たると呑気なもの。

日本軍はどうか。行軍はきちんと四列縦隊を組み、小銃は一樣に肘を張って肩に乗せ、背囊には米、外套、飯盒、毛布等をくくりつけ、一日三食は水のある場所を探して枯木を拾い集めて飯盒で飯と汁を炊き、約一時間を要する。炊飯の煙で敵に場所を知られる結果となる。敵襲に遇えば食わずに出発するというのであった。

さて、この日、師団は南の新京方面に移動命令があったものの、既に腹背に強力な敵に包囲され

た現在、武器弾薬、食料も不足の中、更には多数の戦死者、負傷者を抱え、どう動くべきか迷うことになった。その頃西口戦鬪の混乱に陥った責任を感じてか、師団の河瀬参謀長が拳銃で自決し、更に勝れた装備を誇った工兵連隊長も自決して果てたことで、阿部師団長の苦悩もひとしおであった。

この戦鬪中、師団通信において移動困難な通信機器を山中に捨て、暗号解読書も敵の手に渡ることを恐れ焼却したというところで、関東軍司令部はおろか、他の師団との連絡網が断たれ、隔絶された中で、師団は独自の判断で進むより方法はなかった。

帰国とだまされて

八月二十九日から丸腰の捕虜となった将兵たちは、乗馬と徒歩のソ連混成部隊に守られ、このまま日本に帰るといふ甘言を信じて行き先も告げられずインドルを出発した。

疲れ果てている日本兵が、元気な彼らについて歩くことは苦痛で遅れ気味となる。「トーキョウダモイ。ダワイスカレー（東京へ帰るんだ早く歩け）」帰国にしては何と厳しい行進であろうか。下痢気味の兵隊達は途中道端で用便すると、「ダワイダワイ」列からはみ出る兵を小銃の先でしゃくり、列に戻すのである。食料とて捕虜に給与する余裕があるはずはなく、畑があれば馬鈴薯や菜っ葉をとって野宿に自炊する程であった。

ソ連兵士は行列を後から眼を光らし、腕の時計を見つけると「チャースダワイ」と強引に略奪し、めぼしいものは何でも巻き上げる。腕時計を両腕に五、六個巻いて、互いに自慢し合う連中もあり、腹も立つが何ともならない。日本人将校の皮長靴ちやうかと彼らの痛んだ短靴を強引に交換し履き替えるチャッカリ兵もいる。

日本側でも通訳を通しソ連軍側に抗議したらしく、ソ連憲兵らしいジープが往来してくると、処罰を恐れ高粱畑へ逃げ込む者もいるが、かつての

ゲーペーウーの流れを持つ憲兵は軍紀違反者を容赦なく射殺できる権限を持っているので恐れているようであった。

二日目あたりから、ソ連兵の怒号にもかかわらず落伍者が始まった。ソ連側でも面倒みきれないのか置き去りが始まった。戦友達もかまっていると忽ち銃剣で小突かれる。後ろ髪を引かれる思いで立ち去るほかない。行く先々で野垂れ死者が目についた。

途中「察爾藩^{チャルシン}」という村落を通るが、ここには小規模の日本開拓団があつたという。何と、通る目前に開拓団員が塹壕^{さんこう}を掘り男達が小銃で戦った跡があり、銃弾による穴のあいた鉄帽や食器鍋類が散乱し、全滅したのである。近くには逃げまどう女性、幼児が大型戦車のキャタピラに踏みしだかれたものであろう骨や腐肉が地面にめり込み死臭を放つ現場の前に、言葉もなく顔をそむけて過ぎるほかなかった。

しばらくして前方山岳の上に大きい建物が見え

た。「おう、あれは王翁廟^{ワンヤンビョウ}だ、あの麓に興安の街があるはずだ」地理を知っている兵隊が叫んだ。遂に興安に辿りついた。ここから鉄道で帰国への道が拓けると元気を出し、自然に歩く速度も早くなった。

ひとときわ開けた平地に大河がうねり、川向かいにソ連軍の幕舎と隣に戦車や砲、トラックが駐屯しているのが見えた。日本兵の隊列が近づく姿をみて、泳いで川を渡り近づいた。肌着一枚や全裸の者、酒に酔っている柄の悪いソ連兵である。物珍しげに眺めていたが、一人が背囊の重そうな日本兵をわしづかみに高粱畑に引きずり込み、背囊を改めている姿をみた他の兵隊が真似て、次々略奪が始まった。日本兵は捕まれないよう、行列の中にもぐり込むのが精いっぱい。これこそ屠場に向かう羊の群れ同様であった。

行列は興安の駅どころか、川のそばの草原に二、三日休養ということで宿営の準備となる。日系経営の大きい旧農事試験場のトタン屋根、板かべを

剥いで持ち帰り、各分隊ごとにトタンと天幕で仮小屋を建て、ソ連兵の案内で満人農場から野菜を失敬して飯盒炊さんし疲れを癒す。

その夜、興安の町の方向でソ連の戦勝祝賀会であろうか。花火から照明弾や曳光弾えいこうだんが惜しげもなく夜空を焦がし、迫力のあるお祭り騒ぎが手にとるように臨まれた。――後で知ったことだが、この日九月二日は東京湾の戦艦ミズーリ号において連合国代表のマッカーサー元帥と重光外務大臣の劇的な降伏調印式が行われた日で、この日を記念した勝利の祝賀行事であったわけだ。

その夜更け、日本兵が眠りについたとき、周囲から騒がしい音がした。お祭りに酔っぱらったソ連兵士が女の兵隊を連れて片っ端から時計を出せと威嚇し、女性に渡して男をたてる図となる。口惜しいが抵抗もできず泣き寝入りとなる。酔っぱらい共は次々と繰り込んでくるので、こちらは一斉にトタン屋根をガンガンたたたく、彼らは諦めて逃げて行く。何せ五、六千人もの貧乏集団の街で

はあるが痛快であった。

翌日から食料確保のため、ソ連兵引率の下に小集団で遠くの畑まで出かけ野菜採集だ。満人農民が畑を荒らされることに抗議にくるが、ソ連兵は彼らに銃口を向け威嚇しながら「構うものかいっぱいとれ」と日本兵にけしかける。ただより安いものはない。麻袋に野菜をいっぱい詰め込んで帰り腹を満たす。

次の日の昼過ぎ、分隊員の飯盒を集めて持ってただ一カ所ある押上げポンプの場所に飲み水汲みに行った。珍しくポンプの周囲に人がいないので直ぐ汲み上げて帰ろうとした時、不意に一人のソ連兵が立ち塞がった。「ストーイ、ストーイ（止れ）」。そして銃でついてこいと言っているらしい。

私はロシア語が判らないと頭を振って帰ろうとすると、相手は怒って銃口を胸元に向け、あごでしゃくった。相手は怒って射殺しても戦勝国の兵隊である。日本人が抵抗したので殺つたと申告すれば無罪で通る。ついていくより仕方がない。

近くの作業小屋に連れ込まれ「上着を脱げ」と言っているらしい。肌着の上から隠し物がなければ両手でさぐる。実は戦場で動かないので捨てたのである。時計を拾い何気なく腹巻きに入れていたのが見つかり、彼は喜んでポケットのナイフと共に取り上げた。幸い自分の動く時計は戦闘帽の側に縫い付けていて略奪を免れた。

よく見ると、小屋の中に満人の老人と少年が隅に見えたが、ソ連兵は次の要求をしたところ、少年が流暢な日本語で「兵隊さん、ズボンを脱げと言っていますよ」渋々脱いだ軍服のズボンを満人の老人に渡し交換しなさいと言ったらしく、老人の汚いよれよれの木綿のズボンを履かされた。後でみるとシラミいっぱいのズボンであった。

興安の野営も約一週間が過ぎ、ソ連側としてはこの駅から日本人を送るより、ソ連兵器を母国に運ぶことが優先と考えてか、更に奥地の駅に移動させることに変わったらしく、またまた行軍移

動となった。

突然の移動の言い訳は相変わらず「トーキョウスコラダモイ。ロススキーモスクワダモイ（日本にすぐ帰るんだ。ロシア兵士も本国へ帰れるんだ）」。あるいはソ連兵士達も上層部から騙されていたとも考えられる。

また五列縦隊での「興安の死の行進」は更に続くことで、満州国、関東軍の崩壊の中に身をおく不運とむなしさをかみしめながら流浪の旅は続き、九月七日頃着いたところは徳伯斯トボスで、ここには我が師団の野砲連隊の半地下式の粗末な兵舎があった、開戦直後にソ連戦車隊によって全域に近い襲撃を受けた跡であつたらしい。

生き残り約五千人は、またまた野宿の生活で日中満人の畑から野菜採取したものをブリキの鍋で煮炊きによって飢えを凌ぐ生活であつた。

トボスはかつて陣地構築したウサコウと山で連なる高原で、北満の秋から冬は駆け足でやってくる。九月中旬を過ぎると朝晩はめっきり寒く、霜

が降り紅葉にもなり天幕だけの野宿は厳しいのに、帰国する列車の汽笛の音は一向に聞かれず、あるいはここで冬を越すことにならないかと案じられる。

九月末にようやくトボス駅に有蓋貨車が姿を現し、ソ連側の指示により各連隊ごとに南満を目指し次々出発し、十月上旬のある日、乗車の順番がきて足どりも軽く暗い貨車の中に寝転んだ。「このまま満州の乗船地に着いたら、内地帰還はいつになるのかな？ 年内には家に帰れるのだろうか？ あ」日本はすぐ近くにあるような話題でもちきりで、今までの苦労が吹き飛ばすような雰囲気になりました。

【執筆者の紹介】

出生地 東磐井郡長坂村
学歴 岩手県立農蚕学校卒業
職歴 県立農事試験場遠野試験地
入隊 昭和二十年二月弘前搜索五十七連隊

ハルピン搜索百七連隊

戦闘 旧満州西部国境 五叉溝 西口

入所 昭和二十年十一月九日

収容所 チェルノフスカヤ、マカヴェー、チ

タ、ナホトカ

復員年月日 昭和二十二年十月二十五日

(永徳丸)

復員後の職 東山町厚生課長、総務課長、議事

務局長、東山町議会議長、老人クラ

ブ会長

全抑協活動 東磐井郡支部長

現住所 東磐井郡東山町長坂字里前

家族 妻、息子、娘

(岩手県 田辺 壮久)